参考資料 2

現地実態調査結果

犬猫以外の哺乳類を扱う展示販売会【BLACK OUT】

○施設の運営について

- 年間のイベント回数について、BLACKOUT は年間概ね 10 回程度を目標とし、実際は 8~9 回程度。関東、関西、中部にて実施。出店者は、東京は 120 くらい、大阪は多い時で 100、少ないと 70 程度、京都・名古屋は 70 程度、横浜は 100 前後、埼玉は 120 程度である。
- 基本的にイベント日数は 1 日がほとんどであるが、年に 1 回だけ埼玉アリーナは 2 日。1 日だと午前中搬入、夕方撤退のため実際のイベント開催時間は 6 時間程度。
- 運営体制はアルバイトのスタッフで 20~30 名程度。
- イベントを始めたのは 1999 年である。当初は昆虫専門だったが、現在は爬虫類・哺乳類のイベントがメインである。

○現状について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

- 会場の温度については、爬虫類・哺乳類は種類が多くそれぞれ適切な環境は異なるため、中間的な温度（25~26℃くらい）に設定する。個別の店舗とは異なり、来場客が少ない時と多い時で温度が変わる。特に天井の低い会場は空気の容量が少なく温度が変わりやすいため、出店者が上げたり下げたりの微調整をしている。
- 湿度は会場内では調整できないため、各出店者に任せている。
- 会場からの騒音はないので特に対応していない。
- 出店者との展示・販売時のルールの認識合わせについては、事前にマニュアル（適正な表示など、基本的な内容）を共有。
- 輸送後～展示までの動物の健康・安全の管理について、輸送後に関しては、地震対策、転倒対策（3 段以上の商品を積まない等）の周知を行っている。
- 出店ブースの配置について、スピーカーの真下は BGM やアナウンスがうるさいため避ける。
- 給水について、哺乳類にはいつでも水が飲めるように給水器を入れる。自治体の視察においても実施していない業者がいる場合は指導していると思う。
- 展示する際のケージサイズは哺乳類と爬虫類で大きく変わる。哺乳類・鳥類はどちらかというと犬猫よりの考え方で、生体が動き回れること、餌水がいつで

も補給できることを気にするレイアウトや展示の仕方をしている。

- 生体販売するときに動物愛護管理法に基づいた記載（品種等、繁殖者名、生年月日、所有日、購入先等）を徹底するように言っているが、守れていない業者が５％程度いる。イベント中に発見した場合は口頭で注意するが、それでも守れない場合は今後の BLACK OUT への出店をお断りしている。
- 出店業者の搬入は大半が車である。多くのイベントは土日に開催されており、次回は早くとも１週間後となり、その間、車中で動物を飼育し次の会場へ移動して参加ということは無いため土日に実施し閉場後は速やかに事業所へ戻り、その後生体のメンテナンスをすることが普通である。
- 全体的には飼養管理基準を守れている業者がほとんどであるが、一部脱走等があると、業者はもちろんイベントとしても困るため、主催として厳重注意し、対策は常に考えている。

参考資料２

犬猫以外の哺乳類を扱うブリーダー兼ペットショップ【terra】

（哺乳類／爬虫類ペットショップ・ブリーダー（展示販売会「BLACK OUT2023」「アクアリウム東京ネイチャー2023」の出店者）

〇施設の運営について

- 取り扱いの動物種は、爬虫類、フクロモモンガ、コモンマーモセット、キンカジュー。
- 繁殖している種は爬虫類、フクロモモンガ、キンカジュー。
- 現在販売中の哺乳類は、フクロモモンガが３頭、コモンマーモセットが２頭のみ。繁殖用はフクロモモンガが 10 頭いない程度で、生まれたものを少しずつ売っている。キンカジューは親が１ペアおり、そこから生まれたものを販売している。
- スタッフはオーナー含め３名。

〇現状について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

【イベント時】

- 年間のイベント出店回数は月２回、年 20～25 回程度。冬は冷えを防ぐためカイロを箱に貼って上から毛布を掛け、温度の調整をしている。
- イベント会場への移動手段は車。関東会場には 7～8 時間の移動となる。前日に搬入できるイベントは前日入りし、朝搬入後そのまま開催のイベントはそれに合わせて搬入。移動時から販売用のケージに入れて輸送し、そのまま販売する。
- 会場到着後からイベント終了まで毎日給餌や給水をしている。
- 店舗出発時から帰宅までパッキングした状態は４日間ほど。この４日間で具合が悪くなっていたという事例はない。
- イベントへの出店が連続するときは生体を入れ替えるようにしている。
- 飼養設備について、サル等の哺乳類には給水のボトルを付けている。給餌は、個体によって皿に入れる、給餌用設備に入れる等の対応をしている。
- シェルターや隠れ家等について、フクロモモンガは性格によって、袋を入れなくてよい個体と袋が必要な個体がいる。怖がりな個体には袋を入れる。サル（ショウガラゴやコモンマーモセット）にはタオルを入れており、個体の性格によって、周囲の騒音等の状況に応じて隠れているときもある。キンカジューは広めのケージに入れてタオルを入れている。
- イベント時は基本的に１ケージ１頭で単独飼養している。
- 温度環境について、イベントによって会場の温度が低い時もあるが、その際は

温度を上げるように主催者へ伝える。冬は 28 度に、夏は 26～27 度に設定してもらう。

- 展示の配置について、哺乳類は出店者からも来店者からも見えやすい場所に置いている。
- 顧客の触れ合いについては、動物種によって応じている。

【イベント時以外】

- ケージサイズについて、コモンマーモセット、フクロモモンガは横 45cm×奥行 45cm×高さ 45cm に 1 頭ずつ。キンカジューの場合は横 1.2m×奥行 70~80cm×高さ 1.5m である。
- フクロモモンガもケージが大きすぎると落ち着かないため袋の中から出てこないこともある。
- サルやフクロモモンガ等は餌をあげるタイミングでケージの外に出して、ふれあうようにしている。ケージから出している時間は大体、1 回 5～10 分程度。1 日 2 回出すときもあり、時間があれば少しでも触れ合う。
- 繁殖のために店で管理している個体はペアで飼育している。

参考資料２

犬猫以外の哺乳類を扱うブリーダー兼ペットショップ
【ブリーダー兼ペットショップ A】

（哺乳類／爬虫類ペットショップ・ブリーダー（展示販売会「BLACK OUT2023」の出店者）

〇施設の運営について

・ 2 店舗あり、内 1 店舗では販売のみ、もう 1 店舗では販売と繁殖を行っている。
・ 取扱頭数は全て合わせて 400 頭程度。
・ 哺乳類はフクロモモンガ 12～3 頭、ヒメハリテンレック 5～6 頭のみ。
・ スタッフは 3 ～4 名。状況に応じてアルバイトスタッフを追加。

〇現状について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

・ ケースサイズについて、ヒメハリテンレックは幅 60cm×奥行 45cm×高さ 45cm のケースに 3 頭程度で飼育している。フクロモモンガは幅 45cm×奥行 45cm×高さ 60cm の鳥かごに 2 頭ずつ飼育している。どちらも繁殖を目的として雄雌が同じケージで飼育している。
・ 給餌、水の交換は毎日行っている。
・ 温度について、26℃前後でエアコン管理している。
・ 設備について、ヒメハリテンレックにはアスペンという床材と水入れ、餌、シェルターを備えている。フクロモモンガにはハンモックを備えている。
・ 衛生管理のため、毎日床材を全て交換している。
・ 健康管理について、給餌の際に個体の様子を観察している。フクロモモンガはハンモックの中で寝ていることが多いため、給餌の際に手元に寄せて状態を見ている。状態を観察する上で、食事量、個体の動き、目の色を確認する。食事量が少ない個体は違うケースに隔離して様子を見る。
・ 繁殖可否について、フクロモモンガ、ヒメハリテンレックともに、基本的に餌をしっかりと食べて健康状態に問題がなければ、繁殖させても問題ない。フクロモモンガの場合、繁殖にあたり雄は生後 1 年半程度必要であり、成熟すると臭腺のある頭が禿げてくる。雌は生後 1 年半から 2 年程度必要である。
・ フクロモモンガについて、繁殖が成功し子供が生まれた場合、子供の尻尾がペタッとしている間は、尻尾がフサフサになるまで親子で同居させる。
・ ヒメハリテンレックにおいて、繁殖が成功し子供が生まれた場合、生後約 3 か月間は親と一緒に同居させる。

参考資料 2

犬猫以外の哺乳類を扱う移動動物園【移動動物園 A】

〇施設の運営について

・ 飼養施設：70 種類程度、600 頭程度
馬、ロバ、山羊、羊、エミュー、七面鳥、ガチョウ、アヒル、鴨、チャボ、ホロホロ鳥、モルモット、ウサギ、豚、オウム、サル、ねずみ、ヒヨコ、カメ、あらいぐま、シマリス、リスザル、ペンギン、カンガルー、ヘビ、インコ、フクロウ、ハリネズミ、犬、猫、チンチラ、アルパカ、など
・ 移動動物園（1 回当たりの動物頭数例）：ポニー1 頭、ヤギ 2 頭、ヒツジ 2 頭、ウサギ 10 羽、モルモット 10 匹、チンチラ 1 頭、ミニブタ 1 頭、マウス 10 匹、犬 2 頭、アオダイショウ 1 匹、カメ 8 匹、チャボ 9 話、アヒル・カモ 4 羽、ヒヨコ 2 ケース・26 羽程度
・ また、料金次第ではロバを連れていく。昔はタヌキ・キツネ、昨年まではロバとウシも飼養していた。
・ 移動動物園時のスタッフ数：3 名
・ 移動動物園は 1 日に 2 箇所程度を回ることが多い。受注先は平日の幼稚園・保育園がメインだが、土日のイベント会場などで行うこともある。
・ 現地調査当日のスケジュールは、1 回目は朝 8 時過ぎから園内にて準備、園児向けに 10~12 時にふれあいを実施。2 回目は 12 時半~13 時半は外部向け（来年入園するご家族等）に実施。通常の給餌後にふれあいを開始している。

〇現状について

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

＜移動動物園について＞

・ ふれあい時の注意点として、ふれあい前には誤った持ち方をしないこと、給餌方法を説明している。動物の顔の前に手を出さないように園児へ説明・注意しているが、ひっかかれる場合などがある。しかし、移動動物園を 20 年実施している中で動物の怪我や大きな事故はない。
・ ふれあい時の運営体制については、1 クラス 10～15 名ほどに対して園児の先生 1 名とスタッフ 1 名体制にし、クラスごとに交代で動物とふれあう。また、0 歳児はベビーカーに乗せたままで、ふれあわせずに見せるだけの場合が多い（手をなめてしまう 0 歳児が多く、衛生面を考慮している）
・ ふれあいの内容として、動物を抱っこして心臓の音やぬくもりを感じてもらっている。
・ 動物への配慮として、移動動物園に連れていく動物は体調を見ながらローテー

ションしている。糞便、ケガ、お尻の汚れを確認し、元気な個体を選ぶ。

- また、触れ合い時の餌の与えすぎには気を付けている。
- 衛生面に関して、ふれあい後は手洗いするよう注意喚起しており、会場においても羽一つ落ちていないように園庭の掃除、消毒を行う。
- 安全面について、今はヤギ、ヒツジは柵の中でも行動範囲を制限できるようリードで繋いでいる。

＜飼養施設について＞

- 専属の病院があり、特定の動物のみ年 1 回定期検診を行っている。数が多いためネズミ、ハムスター、ウサギ等の小動物は検診等行っていないが、何かあった際には獣医の診察を受けるほか、定期的に家畜衛生保健所の検査を受ける（サルモネラ菌、病原性大腸菌 O157、高病原性鳥インフルエンザ等）。
- 給餌は朝と晩に行い、その間に清掃を実施する。
- 給餌について、ウサギについては野菜ばかりだと水分が多く下痢をしてしまうため、普段は固形の餌を与えている。ヤギ、ヒツジについて普段は牧草を与えている。
- 清掃について、毎日飼育所のおがくずを交換している。糞については堆肥置場があり、田んぼに提供している。ウサギとモルモットについては尿で濡れている部分を取り換え、爬虫類は新聞紙を交換している。
- 飼育員は 4~5 名。現在の飼育員数で約 600 頭十分見ることができている。熟練した飼育員によって業務のルーティン化、役割分担化できており、具合が悪い動物、気を付けて見る必要がある動物については前日に日報等で共有している。
- 繁殖について、現在、基本的に繁殖は行っていないが、春に子ヤギを移動動物園に連れて行けるよう、ヤギのみ繁殖している
- ヤギの出産は、自力での自然分娩である。長時間分娩や不具合が起きた場合は飼育員による手伝いが発生するが、幼稚園、保育園等に行き運動もしているためそれほど不具合が起きることはない。
- 動物の配置について、アヒルとカモは同じ柵内で飼育している。アヒルとカモ以外は動物種ごとの空間で飼育され、動物種内で A・B 等のようにグループ分けがされている。ウサギ、モルモットについては動物種ごとに区分けされたスペース、かつ、ヤギ・ヒツジから離れた場所で飼育されている。施設全体として動物同士が互いに近接して異種の動物を見ることのできる状況である。
- アルパカは単独飼養している。ウサギ、ハムスターはオス同士喧嘩するものもいることから、オスのウサギは単独飼養。モルモットはトラブル等の有無に応じて単独飼養する場合もある。その他の動物において、動物種によってはオス

とメスを分けて飼養し、繁殖を防止するものもある。チャボ等、相性が悪い場合も離して飼育している。

- 捕食・被捕食動物の配置方法について、トラやライオンのような危険な捕食動物はいない。他の動物を狙っているような動物はその動物から離している。
- 捕食、被捕食の関係性であっても、例えばミニブタと犬等、個体ごとの関係性を自由に構築している。
- 温度管理について、冬は紫外線ランプ（爬虫類)、暖房、ホットカーペットにて対応。小型犬には暖房部屋を用意。ヤギ・ヒツジはおがくずの交換、消毒。ウサギは毎日おがくずの交換、出産時には藁を多めに敷く。夏は山からの風（外気)、遮光ネット、扇風機で温度を保つ。
- 運動スペースについて、馬、ロバは定期的に厩舎から出し運動スペースを確保。ヤギ・ヒツジは裏山のグラウンドに移動するタイミングがある。
- 夜行性の動物種（マウス、チンチア等）について、夜行性に対しての配慮はなく、自然の採光に合わせている。

参考資料２

チンチラ・アオダイショウ

マウス

ウサギ・モルモット

ポニー

ヤギ・ヒツジ

犬猫以外の哺乳類を扱うホームセンター内ペットショップ
【ホームセンター内ペットショップ A】

〇施設の運営について

- 哺乳類の取り扱い種はモモンガ、ジリス、フェレット、ハムスター、ウサギ、モルモット、デグー等
- 犬猫以外の哺乳類は常時 20 匹程度、そのうちハムスターは 10 匹程度が店舗で展示されている状態
- ハムスターは 1 か月以内に入れ替わる（販売されて新しい個体が入荷される）。長くても 2 か月前後
- スタッフ数は 7 名、うち 6 名がフルタイム勤務、1 名がアルバイト勤務
- ペットショップの運営体制としてはホームセンターから業務委託されている
- 営業時間：9:30～20:00

〇現状について（その他哺乳類）

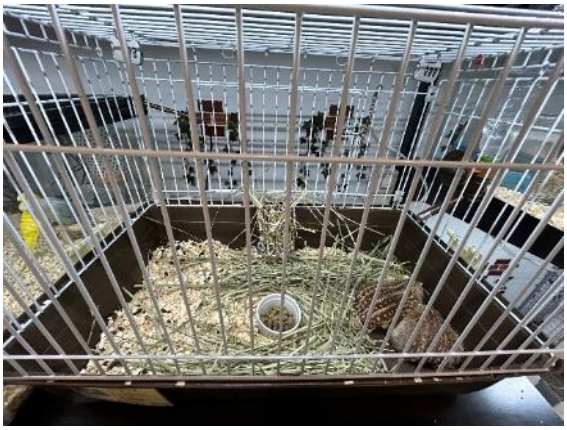
動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

- ケージ内の設備について、モモンガやフェレットにはハンモックを入れている。
- ウサギはサンコー80 のケージを使っているが、シェルターを入れてしまうと、シェルターとトイレのスペースで寝そべれないためシェルターは入れていない。
- 動物はバックヤードに移すことはなく、展示のままの状態で管理されている。20 時から翌朝 8 時半までが消灯時間となる。
- 清掃について、シンクの配置と衛生面を考慮し、犬猫と小動物でケージを洗う場所を分けている。清掃はケージごと丸洗いをしており、従業員がケージ等の汚れ具合によって個々のケージの洗う頻度を変えている。
- 温度環境について、温度は 26℃程度でエアコンで一括管理されている。ベビーの動物がいるときはヒーターパネルなどで温度を高めに管理する。
- 給餌給水は午前に 1 回、夕方に 1 回である。
- 複数飼養について、ハムスターの複数飼養は相性を見ながら判断する。月齢でケージを分ける。45L 水槽で 2 匹までとしている。
- 仕入れについては、同ホームセンター内の店舗が個々に仕入れ管理をしているため、店舗同士での連携はしていない。動物は卸業から仕入れており、届くパターンと取りに行くパターンの両方がある。
- ハムスターの輸送は会社によって違うがプラスチックの輸送箱が多い。
- スタッフの知識について、会社のマニュアルがあり、エキゾチックアニマルが好きなスタッフが多く元々知識のある状態ではあるが、初心者にもレクチャー

をしながら、業務を行っている。

- 元旦は休みだが、スタッフが 1 名出勤する。
- 動物の健康状態について、エキゾチックアニマルも診ることができる病院（獣医師 5~6 名）があり、事前に伝えるとエキゾチックアニマルに詳しい獣医師が来てくれる。猛禽類以外は診ることができるといわれている。また、日報で体調不良や投薬などを記録している。
- その他個体に応じた工夫として、怖がる動物もいるため、モモンガやハリネズミ等、入荷直後は目隠しとして半分隠す等をしている。

参考資料２

ウサギ	ハムスター
フェレット	モルモット
	
デグー	ジリス

犬猫以外の哺乳類を扱うブリーダー兼ペットショップ【熱帯倶楽部】

○施設の運営について

- 哺乳類・爬虫類それぞれ 100 頭程度。哺乳類はフェレット 30 頭、チンチラ 10 頭前後、フクロモモンガ 10 頭前後、モルモット 5 ～ 6 頭、シーズン生体（シマリスやリチャードソンジリス）はシーズンによって数頭～数十頭、ハリネズミ多くて 10 頭。その他デグーやスキニーギニアピッグ、ステップレミング、アフリカヤマネ、コウモリ等。
- フクロモモンガとフェレットは繁殖も行っている。繁殖用個体はフクロモモンガ 3 ペア、フェレット 30～50 頭を飼育している。
- モルモットやリクガメ等、触れ合い動物園を行うこともある。
- スタッフは全部で 10 名。1 日 4～ 5 名（休日 6 ～ 7 名）程度。

○現状について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

- フェレット（頭胴長 30～40cm）のケージサイズについて、幅 76cm × 奥行 46cm × 高さ 50cm のケージ（基本的な流通サイズ）で 1 ～5 頭程度まで飼育可能である。個体が大きくなってしまうとさらに広いケージ（幅 104cm × 奥行 64cm × 高さ 55cm）を使用する必要があり、このサイズであればもっと頭数を入れることもできる。
- チンチラのケージサイズについて、成体の場合最低高さ 60cm はあったほうが良い。高さのないケージの場合はフェレットのケージと同様が望ましい。小さい個体の場合は最低限で考えると幅 40cm × 奥行 40cm × 高さ 40cm 程度のケージに 1 頭で飼育かと思う。人馴れ・環境慣れ前にあまり広いケージに入れてしまうと暴れてしまい怪我をする場合もある。個体が大きくなったら成長に応じて活動範囲を広げることが重要かと思う。
- フクロモモンガのケージサイズについて、成体であっても最低限幅 40cm × 奥行 40cm × 高さ 40cm はあったほうが良い。平均的にはもう少し大きいサイズでも可能ある。
- フェレットのケージ内設備について、頑丈な敷布、トイレ、ハンモックが揃っている必要がある。敷布を敷かない、トイレを入れないとトイレを覚えなくなってしまう。また、フェレットは穴を掘る習性があるため、チップを敷いてしまうと、鼻に入ってしまったり誤飲の原因になったりくしゃみが止まらなくなる、布類やチップを食べてしまうと詰まってしまう、ということも起こる。敷布にすることで体臭が布に移ってフェレットも清潔になる。

- チンチラのケージ内設備について、チンチラはもともと乾燥した岩場に住んでいる生き物であるため、何かに上ったり下りたりができるような状態にする必要があり、中段がないケージにはステージを入れる等の対応をしている。また、中にかじるものがあったほうが良い。給餌の際に牧草やペレット等のかじれるものを入れている。幅が無いケージは高さを、高さが無いケージは幅を重要視してそれぞれ中段を設けるなどして対応している。
- チンチラのケージ素材は通気性の良い金網が一番良い。ただし、チンチラやげっ歯類はかじって鉛中毒になってしまうため、鉛の網は使用しない方が良い。足が抜けないような目の細かい網であることも重要。
- フクロモモンガのケージ内設備について、袋もしくは巣箱があれば良い。回し車に関しては、回し車を好きな個体に対しては設置してもよいが、基本的には推奨しない。フクロモモンガは歩いているとき尻尾は上に丸まらず下についているため、回し車を使うと尻尾が擦れたり、引っかかることがあるため、ポーチや巣箱、止まり木、段差を入れるといった配慮をする方が良い。
- ハリネズミの設備について、回し車を設置することは推奨しない。ハリネズミの背骨は丸まった形状をしており、サイズの合わない回し車を使用すると背骨が反り返ってしまい背骨に負担がかかる。回し車を入れたい場合には、ハリネズミの背骨が通常の形状のまま普通に歩いて使用できるような大きなサイズの回し車を使用することを推奨している。
- ハリネズミ、モルモット、リチャードソンジリス、ステップレミング、スキニーギニアピッグ、ファットテールジャービル、ヒメハリテンレック、アフリカヤマネ、ピグミーオポッサム等には床材を入れ、草食系には牧草も入れている。保温も必要であるため赤外線ライトやヒーターで保温している。暑くなりすぎてしまうことを防ぐためヒーターを飼育スペースの半分に当てている種類もあれば、全体温度を高めたほうが良い種類は全体に当たるようにしている。シェルターは、輸入直後や入荷直後は入れることが多いが、シェルターをずっと入れていると人馴れしなくなってしまうため取り除く。お店で見られ慣れておくと、家に行ってからストレスを感じて体調を崩すということが起きにくくなるため店では「見られ慣れる」という状況をあえて作っている。
- 清掃について、フェレットに対して全体の清掃は 1 日 1 回、トイレ掃除は 1 日 2 回、その他糞の状況やケージ内の頭数によって掃除の回数は異なる。敷布やハンモックは毎日洗い替えしている。チンチラやフクロモモンガも同様毎日掃除する。床材を使用する生体の場合、床材をすべて交換してしまうと自分の臭いがなくなってしまいストレスを感じてしまう場合が多いため、半分ずつ交換

する。あまりにも汚れている場合は全て交換するが、自分の臭いがあるものを入れるようにしている。

- 餌は常に食べることができるようにケージ内に入れたままにしている。繁殖用個体にはプラスで動物性タンパク質の多いものを与える、その他動物の種類に応じた餌を与える等の配慮が必要。給水はケージに取付るか上から吊り下げていつでも飲めるようにし、水は毎日交換している。げっ歯類の場合、ウォーターボトルを設置するとかじって壊してしまったり、金具部分をかじって歯が曲がってしまう場合があるため、野菜や果物で水分を取らせる場合もある。チンチラは野菜や果物を与えると下痢をすることもあるため、基本的に水を与えている。
- 運動について、フェレットの販売説明時には 1 日 1 回ケージから出して、飼い主とのコミュニケーションをとりながら 1 時間程度遊ばせることを推奨している。1 時間遊ぶ個体もあれば 15 分程度で寝てしまう個体もある。店ではワクチン接種が終わっている個体のみ、サークルで遊ばせるようにしている。それ以外の哺乳類は知らない場所に移すことがストレスになってしまうと思う。
- 単数飼養、複数飼養について、フェレットの場合は複数飼養を推奨する。1 頭で飼育してもよいが、複数で飼育したほうが遊び相手とのコミュニケーションが取れて良い。フクロモモンガは単数飼養でも複数飼養でも問題ない。複数飼養の場合、闘争は個体の相性次第である。ハリネズミやチンチラは単独飼養する種類であるが、小さい頃から同居する場合や血縁関係であれば平気というケースもあるし、環境の変化等であるとき急に喧嘩を始めるケースもある。
- 健康管理について、何か異常があったらかかりつけの獣医師に診てもらう。健康診断は、触られることがストレスになる個体もあるため、受けていない。入荷直後の個体やストレスを感じている個体は、店頭において「〇月〇日から販売予定」「入荷直後」等と記載して展示している。
- 温度について、フェレットは元々暑さに弱く寒さに強い種類であり、涼しい方が良い。基本的には室内で飼育し、外で遊ばせるのであればリードを付けた状態で遊ばせる。また、元々巣穴を掘って生活する生き物であり、直射日光もあまり良くない。フクロモモンガの場合、幼い時はある程度保温が必要であり、蒸れを避けながら空気の入替についての配慮やヒーターが必要である。大きくなると 25℃程度でよい。また、複数で飼育していれば個体同士で暖を取ることもできる。
- 触れ合いについて、フェレットやデグーはコミュニケーションをしっかりと取る必要があるが、チンチラは過剰なコミュニケーションがストレスになってし

まう場合がある。

- 店内の触れ合い時には、動物が舐めても問題のない消毒液で手指の消毒の対応と、必ずスタッフが帯同する。就業時間中に動物が触られる時間は、スタッフが給餌の時に触れ合う時間も合わせると１日１個体あたり５分～１０分程度である。ただ、人馴れを重要視する個体は触れ合う時間は長くなる。
- 繁殖可否について、フクロモモンガは雄だと早くて 6 か月で発情する。雌であれば 1 年ほどかかる。
- フクロモモンガは両親で子育てするため、脱嚢すると父親の所に子供を任せ母親は餌を食べることもある。
- イベント時の管理状況について、フクロモモンガのベビー１頭を入れるケージは、最低でも幅 20cm×奥行 20cm×高さ 20cm 以上のサイズに入れて連れていっていた。現在はイベントでフクロモモンガを連れて行っていない。デグーであれば最低限 1 辺 20～30cm 程度の金網のケージが必要であり、チンチラの場合も最低一辺 30～40cm のケージに入れて連れていく。フェレットは、イベント時は店舗で使用しているものと同サイズ（幅 76cm×奥行 46cm×高さ 50cm）のケージに３～４頭入れて連れていく。基本的にどの動物も給水ボトルもしくは野菜やゼリーなどの飲み水の代わりになるもの、餌、その他ハンモックやトイレ、牧草等、個体に応じた設備を入れている。また、イベント出店時は季節により必要に応じてヒーター類や扇風機等の持ち込みをしている。

参考資料２

フェレット（ケージ）	フェレット（サークル）
フェレット（繁殖）	フクロモモンガ
チンチラ	ハリネズミ

犬猫以外の哺乳類を扱う動物カフェ【原宿かわいい動物園】

○施設の運営について

- ミーアキャット 7 頭、ハリネズミ 3 頭、フェレット 7 頭、コモンマーモセット 1 頭、フェネック 1 頭。
- うちハリネズミは 1 頭治療中であり、2 頭を交代で店頭に展示している。
- フェレットは 8 か月、2 才、 5 ～ 6 才の個体を展示している。
- 入場料：大人　30 分　1,540 円～
- 営業時間：平日 12 時 00 分～18 時 00 分、土日祝日 11 時 00 分～18 時 00 分
- スタッフは平日 2 ～ 3 名、休日 3 ～ 4 名で対応

○現状について

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

- 客の受け入れ人数に上限は設定しておらず、状況に応じてふれあえる動物がいるかどうかにて対応している。多くても来店者は 20 人前後である。
- 施設内の温度環境について、施設のエアコンは 25 度程度に設定している。
- 動物は基本的に営業時間中店頭に展示されており、来店者からの要望に応じてケージから出し触れ合わせている。ハリネズミに関しては直接触れ合いするとストレスになるため、ポーチの中に入ったまま、来店者が座っての触れ合いとなる。
- 動物種によって、動き回る、寝袋が好きである、ハンモックが必要である等、それぞれ生理・生態が異なるため、動物種に合ったレイアウトが必要である。そのため、動物種ごとの飼育場所を設置している。また、営業時間外は組み立て式のケージで飼育している。
- 営業時間外の保管ケージは、中で動物が歩けるくらいのサイズであるので、サイズが狭い等の問題はないと考えている。
- ミーアキャットとフェレットについては、営業時間外はそれぞれ 2～3 頭毎に分けてケージ（横 688 ㎜、奥行き 444 ㎜、高さ 665 ㎜のもの）に入れている。営業時間内は、どちらも集団で、運動ができるスペースにて展示している。フェネック（1 頭）のケージはもう少し小さいものである。
- フェレットとハリネズミは触れ合い、えさやりを実施している。また、フェネックは触れ合いのみコモンマーモセットは触れ合いは行なっておらず展示のみとしている。
- ミーアキャットの中でも性格によって顧客との触れ合いに対応できる個体とそうでない個体がおり、触れ合いに用いている個体は 7 頭中 3 頭である。

- 給餌の時間について、フェレットは消化が早いため、いつ食べても問題なく、決まった時間の給餌はない。そのため、餌は来店者の餌やりでもらうものと、常に空間内に置き餌をしている。フェネックとミーアキャットは、営業時間の前後で１日２回給餌をしている。
- 清掃については、餌箱は朝晩洗っており、ケージ等の清掃は朝夜１時間ずつ。さらに日中糞があれば片づける程度である。
- トイレについて、フェネックは基本的にトイレを覚えないため、触れ合いエリア内にトイレを設置しておらず、触れ合いエリア内で自由にしている。営業時間外はケージ内でしている。
- 繁殖について、ミーアキャットはオスとメスを一緒にしている。1 度だけそれによって繁殖経験もある。しかし、ミーアキャットは群れの中で強い個体同士でしか繁殖しないため、自然繁殖する個体は限られる。(現在展示中のミーアキャットの中には、夫婦１組とその子供３頭がいる。）また、ハリネズミはオスとメスを分けて交代制で展示しており、フェレットはブリーダーから去勢手術をしてもらったうえで仕入れている。
- ミーアキャットについては、営業時間内では集団で１箇所に展示しており、他個体と闘争を起こす個体（１頭）はバックヤードに隔離しているが、営業時間外では隔離していた１頭も含め、闘争の恐れがない個体の組み合わせ（２～３頭毎）でケージに入れている。
- 動物の健康状態について、ミーアキャット、フェレット、フェネックには狂犬病、混合ワクチンを年に１度必ず打っている。体調が悪くなったときのみ獣医師に診せている。来店者が怪我をしないよう、定期的に動物の爪切りをしている。
- これまでの触れ合いで客に大きいけがや事故はなく、ひっかくことや噛むこと等ちょっとした怪我は数回あり軽い手当を実施。動物のケガは特段ない。

参考資料 2

フェレット	ミーアキャット
ハリネズミ	コモンマーモセット
フェネック	バックヤード

犬猫以外の哺乳類を扱う動物カフェ【Piccolo Zoo】

○施設の運営について

- 飼養保管している哺乳類と爬虫類全て合わせると 1000 頭以上。
- 触れ合いの哺乳類はフェレット 3 頭、ウサギ 3 頭、ハムスター2 頭、モルモット 3 頭、ハリネズミ 2 頭、チンチラ 2 頭、フクロモモンガ 4 頭。その他に哺乳類ではミーアキャットも取り扱っているが展示のみ。
- 繁殖は主にハリネズミ、ハムスター、フクロモモンガ。
- スタッフは全 3 名、常時 2 名。
- 入場料：大人 1,500 円、小人 1,200 円
- 営業時間：12:00~20:00、平日 180 分制、土日祝は 90 分制

○現状について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

- ケージサイズについて、チンチラやフクロモモンガは上下運動できるようなケージが必要であると思う。
- 設備について、フェレットやフクロモモンガはハンモックやポーチを設置している。
- 哺乳類も温度が一番重要である。フクロモモンガは 30℃を下回ってはいけないためヒーターが必要である。
- 単数・複数飼養について、中には複数で飼育している種類もある。ハムスターは親と子供を同じケージで飼育している。
- 触れ合いについては、要望があった個体をケースから出して触れ合い方を教え、客に渡す。客が子供の場合は、動物を握ってしまう等の危険な状態にならないよう、スタッフが常に監視する。店舗内では哺乳類と爬虫類の両方を扱っているため、隣同士の客の触れ合い動物を近づけると危険な場合は、客に背中を向け合って座ってもらうようにしている。
- 常時猫を店内で放しているが、同じ空間にいるその他小動物を猫が捕食したことはない。
- 哺乳類は爬虫類に比べ触れ合い時間が少なく設定している。小動物はよく動く性質があり、抱っこしすぎるとストレスがかかってしまうため、撫でる程度である。ウサギであれば 1 日に 2、3 回程度しかケージからは出さず、それ以外にはスタッフが世話する上で撫でる程度。
- 触れ合いの際、フェレットにはリードを付けてお渡ししており、絶対離さないようにと伝える。

・ フクロモモンガの離乳時期について、親子が同居したままだと 3 か月程度母乳を飲む個体もいるが、人慣れさせるタイミングを逃し、鳴いて噛みつく個体になってしまうため、ある程度成長したら親とは別のケージに移す。

参考資料２

ウサギ	フェレット
ハリネズミ	チンチラ
フクロモモンガ	ハムスター

犬猫以外の哺乳類を扱う卸売【川原鳥獣貿易株式会社】

○施設の運営について

- 種類は約 230 種（以上）。頭数は 1500 頭羽（以上）。
- 哺乳類は、カピバラ、バク、カンガルー、ワラビー、タヌキ、コモンマーモセット、ハクビシン、ミーアキャット、フェネック、フェレット、コアリクイ、ヤギ、アルパカ、ブタ、ヒツジ、ウシ、ラマ、ワオキツネザル、サーバルキャット、シンリンオオカミ、ホワイトタイガー、ニホンザル、カワウソ、ミニチュアホース、アルマジロ、アザラシ、アシカ、マーラ、ウサギ、マウス等。
- スタッフは 14 名おり、1 日 9 名は必ずいるようにしている。学生が実習で来ているときは手伝ってくれる。
- 建物ごとに職員の担当が決まっており、休みの職員は前日に情報共有している。
- 90％以上が国内での動物園とのやり取りや繁殖。現在は海外からの輸入はない。

○現状について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

- ケージは調教用の動物のみ狭めのケージに入れ、「出してほしい」という欲求を利用してコントロールしている。毎日何分か外に出して遊ばせている。トレーニングの時間は種類によって異なり、ミーアキャットやタヌキは 40 分程度としている。
- 単数飼養、複数飼養について、動物によって分けており、中には違う動物種同士で飼育している場合もある。群れで生活する動物は数頭で複数飼養している。
- カピバラと孔雀等、異種の動物を同じケージ内に入れている意図としては、動物園に移動した後に部屋がないこともあるため、その際どういう動物同士であれば同居ができるか判断する、という点もある。異種同士のケージ内では、哺乳類が体温の高い鳥にくっついて寝ることもある。
- 肉食動物は他の動物と合わせて飼育することはない。肉食動物以外であれば大概一緒に飼育しても問題ない。特に当施設では、鳥は雛のうちから哺乳類と一緒に飼育しているため、同じスペースにいても問題ない。むしろ後から徐々に慣らす方が大変である。
- 隣同士の動物配置について、時には考慮している。サーバルキャットとオオカミ、オオカミとトラを隣同士で入れているが、間に仕切りを入れて互いが全く見えないようにしている。サルも同様、サルが興味本位で隣に手を出してしまい、そこにトラが飛び掛かってしまわないように、完全に隠している。風で臭いが広がることもあるため、仕切りで互いに見えなくすることが重要である。

- 給餌、給水、清掃は毎日行っている。アシカ、アザラシのプールはろ過しているが、水が濁るタイミングで 5 日～1 週間に 1 回は交換している。
- 餌の頻度について、トラは週に 1 回絶食日を設ける。小さい肉食獣の場合絶食は良くない。
- 温度や光環境について、赤外線ヒーターを付けている。小屋の中にヒーターをぶら下げており、寒い時は動物が自分で暖を取りに行く。夏は屋根裏にシャワーをかけるようにしている。
- 健康管理について、掃除しながら糞便や食欲の状態を判断し、対処している。自治体の指示に従い、毎日担当ごとに記録を付けている。病気の個体がいれば獣医師が処置する。消毒は月に 1 回行う。
- 繁殖の判断について、既存の取り扱い個体が少ない場合や新しい血統個体を仕入れた場合に積極的に繁殖を行う。
- 繁殖可否について、適齢期も考慮している。若すぎても年を取りすぎていてもだめである。繁殖は自然な流れであり、子供ができるときはでき、できないときはできない。

参考資料 2

ミーアキャット	カピバラとクジャク
アシカ	サーバルキャット
シンリンオオカミ	ウマ

参考資料 2

コモンマーモセット	フェネック
アルパカ	ニホンザル
ヤギ	ホワイトタイガー